

よい語りわるい語り サイン会のほんとの意味 2019.1.20

会場で本を売る話の続き。

この数年は「ぜひ売ってください」と言ってくれる主催者が  
公民に関係なく、とても増えてきた。

よかった。

それと同時にサイン会を頼まれることも多くなった。

もちろん問題がなければ、喜んでやらせていただく。

問題とは、たとえば「会場の使用許可時間」をオーバーして  
主催者がよぶんな会場費を負担することにならないか？とか、  
会場の場所次第ではバスのつごうのいい発着時間を過ぎて  
並んでくれたお客に迷惑がかからないか？とかだ。

もともと、そのへんは旅人のぼくにはよくわからないことで  
主催者側の判断だけれど。

ではサイン会をとったとき、ぼくからは

「本の販売を主催者側のスタッフが手伝っていただけると助かるのですが」と願います。

ぼく一人で、商品をわたして、計算してお金のやり取りを  
して、そのあとサインをするとなると、後ろの人を相当待たせることになる。  
だがサインだけなら、スムーズに行ける。

基本的に絵本作家は名前の横に簡単なイラストを添えるから時間がかかるが、  
ぼくは文章だけだから、始まったらけっこう早いのだ。

もちろん、販売を手伝ってくれる人に負担にならないよう  
お釣銭と電卓はこちらで用意し、必要な人のためには  
領収書も置いておく。

お釣銭は必ず作っておかないと、大きいお金しかないを待たせたり、  
列が渋滞するもとなる。

学校だとPTAのおかあさんが売り子になってくれることが多い。  
中には商売経験のある人もいて、てきぱき切り盛りしてくれる。

で、売り場を誰かに頼めると、ぼくはその横でサインの方に専念できる。  
主催者には、机を一台、いすを一脚、油性の太字のサインペンを二本、あと  
メモ用紙を用意してもらっている。  
サインペンはおうおうにして書けなかったり、途中でかすれたりするので  
二本ほしい。

ものがたりライブが終わったらすぐ、ぼくは売り場に直行する。

本やポスターを買ってくれた親子がすでに行列を作ってくれている。

さて、立って並んでいる人を前に自分だけいすにすわらせてもらうが、ふんぞりかえってえらそうに思われては絶対いけない。

だが、ある程度はドンとかまえている方がいい。

つまり、多少スターっぽくふるまった方が

並んだ子どもにとって並び甲斐があるからだ。

脱線するがステージに立つ人は堂々としていた方がいい。

ステージ上でもスタッフの前でも

二言目には「わたしは素人で…」「つたない芸で」と口癖にしている人がいる。

一見、腰が低いようだが、なんの言い訳にもならない。

とりわけ客の前では自信満々で、飲んでかかるくらいがいい。

客はおどおどした人のステージなど見たくはないのだし。

サインは本の表紙をめくったところに、

「あて名、なにか一言、日付、ぼくの名前」の四つを書く。

この四つのうち、一番大事なものはなにか？

と、訊かれたらぼくの名前ではない。一言メッセージでもない。

あて名だ。

あて名については、大人では「〇〇様」と自分の名前を書かれるのをかえってわずらわしく感じる人もいる。

だから、すべての人に書くわけではない。

だが、大人が児童書を買うとなれば、たいていは子どもか孫のためだから、

「お子さんのお名前をいれましょうか？」と尋ねる。

直接、子どもが来れば、もちろん直接「お名前は？」と尋ねる。

ここで子どもが自分の名前を言ってくれるが、最近の子は例外なく声が小さい。

緊張しているせいもあるだろう。

そこで主催者に用意してもらったメモ用紙がものをいう。

聞こえたことばをひらがなに書いて発音し「これでいい？」と確認する。

子どもの後ろに親がいれば親にも確認する。

その工程をさぼって本に書いてから「違います」となったことが何度もある。

とくに最近あまり聞いたことのない名前の子がいくらでもいるのであてずっぽうで書くとまちがえる。

勝手にこの名前なら「男だ」と思い込んで

女の子に「〇〇くんに」と書いて泣き顔にさせてしまったこともある。

なぜ、子どもの名前を書くのが大事だと思っているかと言うと

これは自分の子どもの頃の話にさかのぼる。

ぼくは月刊漫画雑誌「少年画報」の愛読者だった。

ある時、人気漫画の「赤胴鈴之助」のはみだしに「作者の武内つなよし先生に  
励ましのおたよりをだそう」という文章を見つけて往復ハガキを書いた。

すると、しばらくして返信が来た。

そこには赤胴鈴之助の絵のゴムスタンプが押され、武内つなよし先生のサインと  
「すぎやまあきらくんへ」とぼくの名前が書いてあった。

ぼくはそのハガキを画鋏で寝床の横の壁に貼って飽かずながめた。

ぼくを喜ばせたのは当代一の人気漫画家の武内先生のサインをもらったことではない。  
その武内先生がぼくの名前を書いたことだった。

名前を書いてもらうのは、その人にぼくという存在を認めてもらうことだ。

忙しいに違いない武内先生が、ぼくの名前を書く何秒かの間だけは  
ぼく一人のために仕事をしてくれたのだ。

幼いなりに、ぼくのプライドはとても満足させられた。

その記憶があるから、ぼくは自分が子どもにサインを求められる立場になった今、  
せつせと「お名前は？」と訊いて書くようにしている。

名前はその子そのものだ。

だから絶対まちがえないよう、いろいろ気を使う。

さて、もうひとつ。実はサイン会にはサインを書く以上に大事な役割がある。  
それはサインを書く1、2分の間だけは、それを待っている人とサシの時間が  
作れること。

「握手を」と言われれば握手するし、「いっしょに写真を」といわれれば  
よほど急いでいないかぎり、それにも応じる。

質問を用意してきた子どもの質問にも答える。

「そういうことができますよ」という誘いの隙というべき時間なのだ。

だから、おはなし会などでは語り終えた人は出口の近くに行って  
立って、客を見送りをすることをお勧めする。

とくに質問があるわけではなくとも、それに気が付いて

「よかったです」とか「おもしろかったです」とか、一言感想を述べてくれる人は多い。  
見送りは、語り手が投げたボールをお客が投げ返せる機会であり、  
その感想を受け取って、語りの会はほんとうに終ることになる。